

特集

アルチュセール・マラソン・セッション

再生産は長く続く？

特集にあたって

——アルチュセール『再生産について』と散乱する不協和音——

大野光明¹⁾

1. 本特集の経緯

2005年5月にアルチュセール『再生産について』（アルチュセール、2005）が出版された直後、立命館大学先端総合学術研究科の院生を中心にして、『再生産について』を読む勉強会が立ち上げられた²⁾。参加していたのはポーランド文学、緩和医療、沖縄文学、社会運動、フリーター／ニートなどを研究テーマとしている院生であり、マルクス主義理論や哲学・思想を専門に研究をしているメンバーはほとんどいない不思議な勉強会であった。

勉強会の立ち上げ後、『再生産について』をめぐる様々な企画が行われている。「勉強会」メンバーが参加したものだけをあげても、2005年11月の社会思想史学会でのセッション、2006年2月言語研究会³⁾での書評会がある。勉強会内部での議論のみならず、このような外での様々な企画に直接・間接に呼応しながら、勉強会メンバーは2006年7月21日（金）と22日（土）の2日間、立命館大学国際言語文化研究所と先端総合学術研究科との共催のもと「再生産は長く続く？——アルチュセール・マラソン・セッション——」（以下、「セッション」）を企画するに至る。

開催されたセッションのプログラムは以下の通りである⁴⁾。

「再生産は長く続く？——アルチュセール・マラソン・セッション——」

2006年7月21日（金）

セッション1：『再生産について』をいま読むことの意味はどこにあるのか

○司会：崎山政毅（立命館大学）

○発表：林淑美（了徳寺大学）、平井玄（音楽評論家）

○コメンテーター：大中一彌（法政大学）、伊吹浩一（専修大学）、山家歩（法政大学／専修大学）

2006年7月22日（土）

セッション2：「ニート」議論で語られないこと——なぜ、まだ、シンドイのか——

○司会：橋口昌治（立命館大学先端総合学術研究科）

○発表：紀井早苗（高槻むくげの会）、上山和樹（『ひきこもり』だった僕から』著者）

○コメンテーター：山田潤（「学校に行かない子と親の会・大阪」世話人、『ハマータウンの野郎ども』共訳者）、今野晃（専修大学）、能勢桂介（立命館大学先端総合学術研究科）

セッション3：継続する暴力・搾取への抗いに向けて——社会構成体の〈周辺〉をめぐる呼びかけ——

○司会・問題提起：大野光明（立命館大学先端総合学術研究科）

○発表：小野俊彦（九州大学）、原口剛（大阪市立大学）

○コメンテーター：伊吹浩一（専修大学）、阿部小涼（琉球大学）

セッション4：総括セッション

○司会：大野光明

○発表：西川長夫（立命館大学）

○ディスカッション：萩原一哉、橋口昌治、山本崇記（以上、立命館大学先端総合学術研究科）。

本特集はこのセッションで発表され、話し合われた内容をもとに、セッション参加者に『再生産について』をめぐる問題提起・論点と、参加者それぞれが今・ここにおいて対象としている課題（「課題」という言葉では軽く語れないほどの生そのもの、といった論考もある）とを繋ぎ、書いていただいた文章やインタビュー記録を集めたものである。

2. 再生産は長く続く？

『再生産について』は当初2巻からなるはずの著書のうちの第1巻として書かれた未完原稿である。第1巻は「資本主義的生産諸関係の〈再生産〉について」を、第2巻は「資本主義的社会構成体における、〈階級闘争〉の諸問題」(p26-27)⁵⁾を論じる予定であった。第2巻は書かれることがなく、私たちはその内容を『再生産について』の中でのいくつかの予告を通じて想像することしかできない。

『再生産について』の原稿の日付は1969年5月～6月である(p287)。アルチュセールは、1968年フランスの5月革命の息吹⁶⁾や「ベトナム革命と中国革命の途方もない経験」、「民衆闘争(反ファシズム闘争、「第三世界」諸国の解放運動、フランス帝国主義に次いでアメリカ帝国主義に対するヴェトナム人民の勝利した闘争、アメリカ黒人の闘争、学生叛乱、等々)」の興隆を眼の前にしていた(p31)⁷⁾。その中で「マルクス-レーニン主義哲学が革命の武器というイデオロギーのおよび政治的なその機能を果た」(p32)さねばならないというある種の使命感と危機感を抱きながら、文章を書いたようである。実際の運動と理論的な思考との緊張関係の中で作業であったのかもしれない。

資本主義の再生産、すなわち搾取のシステムの再生産はなぜ続くのか、とアルチュセールは問う。生産の最低条件は生産諸条件の再生産である。よって、あらゆる社会構成体は、生産諸

条件, すなわち生産諸力と生産諸関係の両方を再生産しなければならない。

再生産に特異な役割を果たすのは、上部構造 (国家, 国家の諸装置) である (p36)。国家を「<国家権力> (そしてその掌握者たち) と<国家装置>」 (p121) とに区別した上で、国家の2つの装置 (国家の抑圧装置と国家のイデオロギー諸装置) の機能が理論的に検討されている。

国家の抑圧装置は国家元首, 政府のもと, 行政, 軍隊, 警察, 司法, 裁判所, 刑務所などから成り, 中央集権化された1つの機関 (身体) として機能している (p196)。国家の抑圧装置が直接乗り出し, 指令を出すことで, 人が動く/動かされることは少ない, とアルチュセールは言う。国家の抑圧装置の介入を受けずとも, 人々は, 再生産のプロセスの中での役割を演じきる主体として日々を生きる。そこで, アルチュセールは次のように問う。「再生産」が行われるべく, なぜ人はひとりでに歩むのか, と (p248)。

その問いに応えたのが, 国家のイデオロギー諸装置とイデオロギーの働きに関するアルチュセールの画期的な理論化であった。すなわち, 生産諸関係の再生産は上部構造 = 国家の抑圧装置と国家のイデオロギー諸装置によって保証されるのであり, 特にその後者の機能が重要なのである。

イデオロギーとは単純な観念ではなく, 物質的存在に依拠しており, 諸実践の中に存在するものである。イデオロギーは, 諸実践の中で主体としての諸個人に呼びかける。そして諸個人はその呼びかけに振り向き, 応えるという具体的な営みの中で, イデオロギーのシステムの中の主体として主体化 = 隷従化するのだ (「服従, 普遍的な再認, 絶対的な保証というこの3重のシステム」 p275)。

その物質的な基盤であり, 身体的所作を生み出す場が, 国家のイデオロギー諸装置である。アルチュセールによる暫定的リストによれば, 学校装置, 家族装置, 宗教装置, 政治装置, 組合装置, 情報装置, 出版・放送装置, 文化装置である (p121-122)。国家のイデオロギー諸装置は, 現実的・物質的な諸制度・諸組織に対応しており, それらの支えの中で, 一見イデオロギー的でない諸実践の中——「われわれの日常的な何ということもない生活の日々」 (p137) ——にまで根を下ろしている (p122 - 125)。イデオロギーの機能において, 公私の区別はあくまで些細なことである (p130)。特にイデオロギーとは無縁に見える「私的な制度のすべては, 国家の所有物であれ, これこれの私人の所有物であれ, いずれにしても, <国家のイデオロギー>のもとで決定された<国家のイデオロギー諸装置>の諸部分として, それらに固有な形態で, 国家の政治や, 支配階級のそれに奉仕することで機能するのである」 (p129)。

国家のイデオロギー諸装置は, ナショナリズム, 自由主義, 経済主義, ヒューマニズムといった眩い理念を通じて人々に呼びかける (p199)。また, よりミクロなレベルでは, 国家のイデオロギー諸装置は, 「やりがい」や「幸せ」といった感情, 快感や達成感の中にさえ入り込んでいく。こうして, 諸個人は, 再生産を保証するべく, 尾行する警官抜きでひとりで歩むことのできる主体として生き続けるのだ。

これはまるで出口なしの世界ではないのか? 資本主義と搾取の再生産は永遠に続くかのようなものである。しかし, アルチュセールは再生産のプロセスは階級闘争のプロセスでもあることを強調している。私たちの生きる世界は「矛盾を含む複合性」やその内部で「互いに対立し, …矛盾する諸傾向」を孕んだものであり (p53), 「部分と部分, 全体と部分の関係のなかには, しば

しば「亀裂」, 「ずれ」, 「超越的侵入」, 「凝縮」, 「圧縮」などの言葉で表現するほかはないような関連が存在する」のである(今村, 1993: 23)。よって国家のイデオロギー諸装置が常にズレや矛盾を孕んでおり, 「しばしば苛烈な階級闘争の場でもあるのだ」(浅田, 1983: 50)。よって「支配的イデオロギーの再生産のための闘いは, つねにやりなおされるべき未完の戦いであり, またつねに階級闘争の掟のもとにある」(p301)。その階級闘争を通じて勝ち取られるべきものは, 国家権力の奪取ののちの, 国家そのものの廃絶である。

セッションのタイトルを「再生産は長く続く?」とした理由は, 上記のようなアルチュセールの徹底した理論と目の前の現実から, 再生産が永遠に続くかのような「脱力感」を抱きながらも, 「そんなことでたまるか」と思う「違和感」や「主体」を演じきれない瞬間にこそ, 着目したいからであった。

3. 違和感とともにある交渉的読解

この草稿が書かれてから40年近い時間が経った今, アルチュセールの発した問いが有効なままになっているという主張がなされている。『再生産について』の「序文にかえて」よりジャック・ビデ, 「訳者解説」より西川長夫の言葉を引用しよう。

この著作は過ぎ去った時代から舞い戻ってきたように見えるかもしれない。たしかにこの著作は一部, 今となっては実行不可能な見解を述べている。しかしながら, この著作は, 乗り越えられたと考えることは依然として全くできないような次の問いに私たちを直面させる。すなわち, 自由と平等の理想を声高に叫ぶ社会のなかで, ある者たちによる他の者たちの支配が絶えず新たに再生産されているのはどのような条件においてであるか?(ビデ, 2005: 7)

本書の読者は, 教条主義とも見まがうマルクス-レーニン主義的の原則がくりかえされるのを読み, マルクス-レーニン主義の亡霊を見る思いがするに違いない。だが思いかえしていただきたい。われわれが本書を読んでそのように感じたとするれば, それは同時に, われわれがいかに無原則的な保守化の流れに遠く押し流されてきたかを物語ってもいるのである。そしてわれわれが遠く押し流されたあとの知的廃墟にどっと流れこんできたものを一言で要約すればリベラリズムと言ってよいであろう。現在の体制の維持を前提としたリベラリズムは現代社会の部分的な不正や不平等については語るが, そうした不正や不平等を生み出す根本的な構造については口を閉ざす。だが本書においては, そのようなりベラリズムや経済主義あるいはナショナリズムにかんする根底的な批判がすでに前もって明快な言葉で語られているのである。そしてとりわけ「再生産」という観点は現在, おそらく当時アルチュセールが予想した以上の現代性をもっている。(西川, 2005: 442)

今日, いわゆるマルクス主義理論や, アルチュセールが『再生産について』を熱中して執筆していた1960年代後半における社会主義や共産主義を掲げる運動は, 忘れ去られるか, 呼び戻

されたとしても「ちょい悪おやじ」として娯楽的に消費されるような状況でもあるのではないだろうか。『再生産について』を読むということは、「過ぎ去った時代から舞い戻ってきた」という時代遅れのような感覚を伴いつつも、翻って、その感覚は「われわれがいかに無原則的な保守化の流れに遠く押し流されてきたかを物語ってもいる」ことを指し示してくる。それは読むことを通じて自らを照射し直す、逆説的な違和感である。

今日の世界を語るキーワードとして「グローバリゼーション」や「ネオリベラリズム」があるだろう。グローバルに貧富の格差は拡大・再編され、搾取の構造は再生産され続けている。国籍を問わず、より弱い立場に置かれる人々に対する搾取や暴力があからさまな形で現われている（例えば野宿者排除や外国籍の子どもからの教育権の剥奪の動き）。また、「勝ち組／負け組」や「自己責任」といった言葉のもと、現状に正当性を付与し、放置・忘却するような現実がある。この現実には構造的・公的な課題を、あたかも主体的な選択・能力の結果であるかのように、私的・非政治的事象として<翻訳>するような巧妙な動きであるだろう。このようにして搾取と暴力が、するりするりと容認され、隠蔽されていくプロセスこそが、アルチュセールが「再生産」という言葉に込めた現実であると思う。今も私たちは再生産の只中を生きている。

であるならば、うっすらと、あるいは強烈に感じる現実への疼きや軋みを基点にして、イデオロギーの作用とその中で生きる自らの生の政治性を顕在化させながら、現在とは異なる生や関係性の構成を希求することが求められるのではないだろうか。「過ぎ去った時代から舞い戻ってきた」と思いつつ読み流すのではなく、自らの疼きがなぜ生まれているのかを問うこと、その疼きを基点にしながら自らを変成させていくような、『再生について』と自己との交渉を通じた読み——交渉的読解——こそが重要なのだと思う。

このような問題意識のもと、本特集ではゆるやかに以下の3点を論点として設定している。

第1には、『再生産について』を今、読むことの意味とは何なのか、その射程はどこまでの広がりを持っているのか、という点である。

そして、第2には、今日における再生産のあり方を、より具体的な文脈・事象のもとで検討することである。セッションおよび本特集では、企画した勉強会の興味・関心は労働にあった。また、労働者・労働力を（再）生産する場である教育現場、特に学校の機能と労働との関係性に着目している。学校や労働現場について、「学校に行かないと仕事でシンドイ思いをする」、そして「学校を出ても仕事でシンドイ思いをする」という（橋口昌治による企画ビラ抜粋）、「シンドさ」を基点として階級的、民族的、ジェンダー的な分断と社会的・技術的分業を再生産、固定化する機能を検討している。

最後に、第3点としては、アルチュセールが散在的に言及している、再生産のプロセスに絶えず同時多発的に内在化する反作用や軋みを、今・ここにおいて、どう抵抗の実践としてつないでいけるのか、という点である。社会の中に、あるいは自らの中に、常に既に存在する反作用や軋み（「シンドさ」）を顕在化させ、それを抵抗の力能へと編成・変成させる中で、異なる世界の可能性へと、未発の関係性へと、つなげることはいかに可能であるのか？

4. 散乱する不協和音のなかで

本特集に掲載される論文、エッセー、インタビューは、2つの意味で散乱する不協和音の集合のようだ。

まず、セッションにおいてもそうであったが、『再生産について』との距離の取り方、参照の仕方については全て執筆者の判断に任せてある点である。そのため、中には『再生産について』をあっさりと素通りしつつ、遠いところで響かせながらも、ほとんど言及をしないものもあり、それぞれが生きる独自の場から言葉を紡いでいる。アルチュセール（あるいはマルクス主義理論やフランス現代思想の研究者たち）にとっては不協和音としてしか捉えられないものなのかもしれない。

また、その一方で、『再生産について』で論じられたイデオロギー、主体化、搾取、資本主義といった、今日の日本や世界では語られなくなったキーワードを、真っ正直に論じている点がある。今・この世界にとっては、不協和音の散乱状態であると思う。

この不協和音はあなたに向けた、散乱した〈呼びかけ〉である。不協和音たちは、あなたにとって、ざらついた違和感を伴いながら、時に神経を逆なでしさえるようなものであると思う。あなたが感じた不協和音を予定調和化することなく、その〈呼びかけ〉に応える中で、別様の世界を切り開ききっかけが生まれることを期待したい。そして、そのざらっとした感覚から、何を見出し、何を感じたのかを、マラソン・セッションという終りなきセッションの続きとして語り合う場をまた作りたいと願う。

注

- 1) 立命館大学先端総合学術研究科院生（休学中）。ir002977@ce.ritsumeiji.ac.jp, mitsuakick@hotmail.com。
- 2) 「勉強会」についてはHP (<http://www.ritsumeiji.ac.jp/acd/gr/gsce/g/alstudies/alstudies.htm>) を参照。不足している点は多々あるが、『再生産について』をまとめたレジュメなどもアップロードしている。
- 3) 言語研究会での合評会については<http://www.arsvi.com/0a/gk/2006.htm>を参照。また、合評会では勉強会メンバーより大野光明と橋口昌治が報告を行った（大野「アルチュセール『再生産について』から脱-再生産に向けて」（大野、2006）、橋口「『人柄』の競争と『生産／再生産』の溶解」）。
- 4) 肩書・所属先は当時のもの。
- 5) ページ番号のみの引用はすべてアルチュセール『再生産について』（アルチュセール、2005）からのものである。また、引用中の[...]は省略を示し、強調（濁点）は断りの無い場合は原著のものである。なお、漢字表記の数字はすべてアラビア数字に引用者により改めた。
- 6) ただし、アルチュセールは五月革命の際は、パリ近郊の精神病院で鬱病の発作の治療を受けていたという。詳しくは『再生産について』所収のバリバル論文を参照のこと。
- 7) ここに引用したようにアルチュセールは、「民衆闘争（反ファシズム闘争、「第三世界」諸国の解放運動、フランス帝国主義に次いでアメリカ帝国主義に対するヴェトナム人民の勝利した闘争、アメリカ黒人の闘争、学生叛乱、等々）」p31の興隆を当然知っており、意識しているのであるが、『再生産について』では、人種やジェンダー、植民地主義の問題が真正面から論じられていない。資本主義的生産諸関係一般を論じるがゆえの限界であったのか、あるいは旧宗主国・フランスの「学問の中央集権」（西川、2006：436）に伴うアルチュセールのポジショナリティゆえなのか。いずれにせよ、今日において資本主義の「再生産」について何がしかを語るにあたっては、人種、ジェンダー、新植民地主義、グローバ

特集にあたって (大野)

リゼーションなどについて論じることは避けて通れない。本特集において、少しでもその穴が批判的に検討されてることを期待しているが、その判断は読者に任せたいと思う。

8) []内は引用者による補足。

参考文献

- 浅田彰, 1983「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」『思想』707号, 1983年5月号。
アルチュセール, ルイ (西川長夫, 伊吹浩一, 大中一彌, 今野晃, 山家歩・訳), 2005『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社。
今村仁司, 1993『アルチュセールの思想[歴史と認識]』講談社。
大中一彌, 1996「ルイ・アルチュセールの国家とイデオロギーの理論——『再生産について』を中心に」『早稲田政治公法研究』53号, 1996年12月号。
大野光明, 2006「アルチュセール『再生産について』から脱-再生産に向けて」(2006年2月21日, 言語研究会での報告。URL: <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/db2000/060221om02.htm>)
西川長夫, 2005「訳者解説——再出発のために」(アルチュセール『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社)。
ビデ, ジャック, 2005「序文にかえて」(アルチュセール『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社)。

付記

セッションならびに本特集を企画・実現するにあたって、立命館大学国際言語文化研究所ならびに立命館大学先端総合学術研究科の教員・スタッフの皆様からは多大なるご支援をいただいた。また、院生ゆえの危なっかしい編集体制のもとで、執筆者の皆様には、素晴らしい文章を用意していただいた。この場を借りて心より感謝申し上げたい。どうもありがとうございました。

